

うえはた てつのじょう  
上畑 鉄之丞 先生 追悼文



うえはた てつのじょう  
上畑 鉄之丞 先生のご逝去を追悼いたします

首都大学東京・名誉教授 星 旦二

上畑 鉄之丞先生は、2017年11月9日にご逝去されました。まさに、「巨星落つ」の思いです。

上畑先生は、1940年滋賀県にお生まれになり、1965年岡山大学医学部をご卒業されてから同大学院で学ばれ、1970年には、「脳卒中の発生要因に関する衛生学的知見」で医学博士になられました。その後、1973年には、杏林大学医学部衛生学教室の助教授に就任され、1987年には、国立公衆衛生院疫学部成人病室長になられました。その後、栄養生化学部長を経て1997年には、国立公衆衛生院次長に就任されました。退職後には国立公衆衛生院の名誉教授になられ、2002年から五年間は聖徳大学教授としてご活躍されました。

上畑先生は、過労死研究、過労死予防施策に関する先駆者であり、同時に第一人者としてご活躍されました。2005年には過労死・自死相談センターを設立され、実践的な社会的活動もされてきました。

また、日本産業衛生学会専門医指導医でもあり、何よりも日本社会医学会理事長としてご活躍され、学会の発展に寄与されました。

私は、日本社会医学学会での活動でもとてもお世話になりました。学会の編集委員を推薦いただいたのも、上畑先生からの指示でした。実は、それ以前から国立公衆衛生院で研究と教育それに実習面でもとてもお世話になりました。私たちの主な活動は、保健所職員の卒後教育がメインであり、卒後実践教育と実践的研究が主な業務でした。ですから、研究成果を論文化するためには、とても時間がかかり、実験系と比較してとても苦労していました。また、当時の厚生省は「保健所機能強化」という、実質は保健所縮小化施策を決定し、その潮流の中で、私たちは、「全国生き生き公衆衛生の会」を立ち上げ、様々な保健所縮小化を阻止する活動を続けてきました。その事務局機能を公衆衛生院で担っていました。そのような活動に対してもとても暖かく見守っていただきました。保健所勤務を経験した者を疫学部の研究員として採用することに応援いただいたことも忘れません。

また、上畑先生が国立公衆衛生院次長になられてからは、研究費配分の点でも、論文になりにくい活動だからという名目で、その配分について、陰陽にご配慮いただきました。とても、ありがたい限りでした。

ある時、先生は、その暖かい支援の裏話をされていました。「自分は国からの科学研究費獲得にとっても苦労したから、あんたらにはそうさせたくないんだ」と述べられていました。

論文になりにくい実践活動にも実践面と研究費の両面で、われわれ「弱者」に対しては、とても心優しい先生でした。過労死になるほどの労働者に対するやさしいまなざしは、我々にも注いでいただいたように思います。

『過労死サバイバル』を中央法規より出版されたインタビューを見せていただきました。過労死という造語を創造されたのは、「第一次石油ショックで高度経済成長が一気に瓦解し、企業倒産が増加する中で労働者の解雇やレイオフ(一時解雇)が多発し、その頃から、40代後半くらいの中老年労働者の中に、持病の高血圧症を悪化させて脳卒中や心筋梗塞などの病気で死亡する人が目立つようになり、「せめて労災補償金だけでも…」と労働組合の担当者に付き添われて大学の研究室を訪ねてくる遺族が増えてきたことが背景のようでした。遺族の話聞き、「あんな無理をしなければ…」と病気の原因が“働きすぎ”にあることを示唆されたことから、「過労死」という言葉を使うようになったとのことです。

過労死の学術的なデビューは、1978年に長野県松本市で開催された第51回日本産業衛生学会で初めて公式に過労死という言葉を使った発表を行った時のようです。

脳血管疾患や心筋梗塞が発症して死亡した例を集めて分析すると、「深夜労働」「長時間労働」「責任の重い労働」「密度の高い労働」といった何らかの促進要因によって高血圧や動脈硬化などが悪化し、重い急性循環器障害を引き起こすというものであり、一連の結末を「過労死」と提案したそうですが、学会での反応は冷たく、妙な珍説を言い出すと冷笑する研究者もあったようです。

国際的な活動もされていらっしやいました。台湾と韓国では、過労死について講演をされ、国際協力の必要性を述べています。上畑先生が命名された、過労死「karoushi」は、世界共通用語になっています。

2013年に、私が学会長を拝命し、首都大学東京で開催された第54回日本社会医学会総会では、上畑先生による集大成として、過労死をめぐる総括的な基調講演をしていただきました。上畑先生が長年ライフワークとして取り組ま

れてきた「過労死」の集大成としての基調講演であり、多くの聴衆の皆様には、感動と感銘を残していただきました。その後、この講演録を基盤として、学会誌に過労死総説を書いていただくことを、何度となくお願いしていましたが、かないませんでした。とても残念なことでした。

上畑先生が命名された我が国特有の「過労死」現実を消滅させたいのですが、残念ながら「過労死」用語は、永久不滅のように思います。極めて残念ですが、大企業優先の働き方改革法案が国会で採択されました。

このような状況だからこそ、上畑先生のおもな出版物を以下に記し、学びなおしたいと思います。また、偉大な功績に対し、舌足らずの追悼文で申し訳なく思います。

「天国での安らかなくらし」をお祈りいたします。

#### 著書

- 『過労死』(労働経済社)、  
『過労死とのたたかい』(新日本出版社)、  
『過労死の研究』(日本プランニングセンター)、  
『過労死サバイバル』(中央法規)ほか。
- 『イタリアの労働環境と健康』松田博共編著 イタリアの社会医学研究会訳 労働経済社、1981
- 『過労死 脳・心臓系疾病の業務上認定と予防』田尻俊一郎共編著 労働経済社、1982
- 『地域産業保健』竜野由子共編 医学書院 公衆衛生実践シリーズ、1985
- 『オフィス・ストレス VDT 職場の健康マニュアル』阿部真雄、  
千田忠男共著 労働旬報社、ヒューマン・ネットワーク・シリーズ、1988
- 『疲労の医学』編 日本評論社 からだの科学 primary 選書、2010 翻訳[編集]
- ロバート・A. スパソフ『根拠に基づく健康政策のすすめ方 政策疫学の理論と実際』監訳 水嶋春朔, 望月友美子, 中山健夫訳者代表 医学書院、2003

## 上畑 鉄之丞 先生の思い出

仙台錦町診療所・産業医学健診センター長 広瀬 俊雄

上畑先生が逝って以降、過労死に関連しての相談を受けたり、講演・講義を担当し、資料を用意したりする度に上畑先生との事が思い出されています。

「過労死研究」を御一緒にして来た訳ではありませんが、「過労死の取り組み」は、長い々々お付き合いだったと思います。最初にお会いしたのは先生が初めて日本産業衛生学会総会で、過労死 17 例を報告された時だったかと思います。その頃の私は、宮城民医連坂総合病院で、呼吸器科長・救急担当で産業医学科も兼任し、自分が過労死するのを懸命に防いでいました。産業医学科開設してすぐに日本産業衛生学会に入会し、参加し始めた訳ですが、会期中に「若手何タラの会」という集まりが開催されていて、上畑先生に誘われて参加しておりました。

1988 年 4 月、全日本民医連の委員会で御一緒にいた大阪西淀病院の田尻先生から、「労働による健康障害の電話相談を開催したところ、100 人を超した。全国規模で相談電話を開けないか」との電話を当日の夜半に戴きました。直ぐに必要性を強く感じ、上畑先生に相談し、やることになりました。弁護士他は、上畑先生が代表を務める「ストレス疾患労災研究会」を通じて打診し、私は、全日本民医連労働者健康問題委員に話すこととなりました。その結果、東京、大阪、仙台を含む 7 か所での開催が可能になり、細部について上畑先生と相談して進めました。以来、過労死 110 番は、30 年続いております。上畑先生から「全国規模での遺族の会を作るから手伝って」という声が掛かり、「準備会」から参加しました。皆さん、当然ながら、心の準備も無い時に突然襲った夫・家族の「死」という現実を前にして、「同じ境遇」というだけが共通という人達の集まりで、とても息苦しい雰囲気の中、先生の隣に座っておりました(参考:「枯葉に寄せて」初代会長馬淵郁子著)。宮城県でも同じ頃に「遺族の会」を組織し、相互の交流を始めました。「全国」より若い奥さんが子ども連れて親と共に参加して、やはり涙が乾くのをじっと待っていた気がしますが、皆さんは、それぞれの「会」を通じて少しずつ「成長」していったことを思い出します。今日では、「過労死防止法」の成立や「労働法制改悪」阻止の戦いで先頭に立って奮闘されている「過労死家族の会」の方々の力強さを見るにつけ、30 年の積み重ね・歴史の重みを痛感します。

日本産業衛生学会での過労死に関する検討は、1992 年に設置された「循環器疾患の作業関連要因検討委員会」からです。上畑先生が委員長で、委員は大企業産業医、大学の研究者、自治労働務の医師と広範でしたが、皆、上畑先生を信頼していることを痛感しておりました。3 年間で質の高い報告書を作り上げましたが、過重労働や夜勤制限の提案を巡って理事会内でも学会全体でも意見の対立が持ち上がり、上畑委員長の苦労は想像を絶しました。先生の代わりに、あちこち説明しに行ったこともありました。学会内の不一致と混乱解消の方向性を探る為に富山総会において、理事会主催の「ディベート」が企画され、報告書提案者側として、上畑先生と私が指定され、「提言」に反対する側は、2 産業の代表産業医となり、激しく・長時間の論戦が展開されました。聴衆は、その前・後でも最高だったと記憶しております。心身疲労で折れそうになる先生の背中を押し続け、理事会からの「学会として合意可能な報告書作成」の為に「第 2 次委員会」が、組織された際には、再び先生に委員長を引き受けて貰いました。精力的に会議を重ね、第 2 次報告書は、理事会で承認を受け、学会見解として発表されました(今も学会 HP 掲載中)。この 2 つの報告書がもっと早く行政や企業に認められていたなら、どれだけの犠牲者が防げたのかと思うと上畑先生のくやしさはいかに分かりだったかと推察されます。

もう一つの先生との思い出は、「働くもののいのちと健康を守る全国センター」結成の経緯です。1 度頓挫した後、全日本民医連労働者健康問題委員長として、再挑戦の役を与えられ、全日本民医連事務局長や全労連担当者と共に、多くの単産・連合組織、全商連や自営業者組織を回りました。期待も強まる中、如何なる組織が必要なのか、妥当なのかが遡上に乗って来た頃、最も話し合ったのが上畑先生とでした。先生からは、多くの課題で健康障害に取り組む中で感じてきた「組織」と「個人」との関わりについての思いがいつも強く出されました。「いの健センター」の現在に至る活躍に目を見張りますが、上畑先生は、早期に役員を降りました。結成を進める役目を共に持っていた一人として、先生を含む多様な意見をまとめきれなかったことに至らなさを痛切に感じています。

日本産業ストレス学会結成大会(1992 年)会場で、隣に座っていた私に静かに語る先生のストレス疾患に取り組む決意が今も耳に残っています。これからもその思いを忘れずに取り組んでいきたいと思っています。

